剛太から教えられた佳美の家は、校外の丘陵地にある高級住宅が立ち並ぶ東の一角にあった。庭付きの大きな洋風の家だ。バス停を東に２００ｍほどと剛太が説明したとおりに目的の家はすぐに分かった。健司は購入したばかりのハーレーの大排気量のエンジンを切ると路駐させた。門には「伊藤」とプレートがはめ込まれている。生贄夫人のフルネームは「伊藤佳美」。玄関の前に立つと、表札には伊藤佳美と新一の母子の名前だけがあった。呼び鈴を押す。

しばらくして玄関ドアが開き、佳美が顔を出した。健司の顔を確認すると、玄関のドアが大きく開けられ、招き入れられた。ベージュのフレアスカートに花柄プリントの白を基調としたブラウス姿は、先ほど喫茶店で見た和服の装いからがらりと雰囲気が変わっており、髪を下ろした姿はさらに若く見える。佳美の胸の隆起といい、スカート越しにも分かるむっちりした臀部のうごめきといい、何とも魅力的な女性だ。廊下を先に歩く佳美のスカートに包まれた臀部は、左右に揺れ、その官能の水桃の媚肉の弾力を見せつけているようにさえ感じられる。フレアスカートからのぞく脚は白くすらりとしており、スタイルのよい女だ。

「お飲み物はコーヒーでいいかしら？それとも冷たいものにしますか？」

健司はコーヒーでいいと言ったが、その目は佳美を捕らえてはなさない。佳美がコーヒーと洋菓子を運んで、ソファに座った健司の前の低テーブルに置いた。ガラス板の透き通るテーブルだ。そのテーブルには、大ぶりなバナナが一房入った籠と、いくつかの鶏卵の入った籠がある。不思議な取り合わせに鶏卵を一つ手にとった。生卵であった。佳美は恥じた表情でリビングの絨毯の上に正座した格好で、

「今夜、これを使って、わたし、虐められるんです。エネマパーティはつらいばかり……私のお尻は地獄の苦しみを

味わうのです」
と言いながら立ち上がると、健司と向かいのソファに座った。膝がスカートから露出している。白い足が横に流されて綺麗に並んでいた。ストッキングを穿いていない生足だ。
「剛太とはいつからだい？」
佳美は、つぶらな瞳をまばたきすると、
「半年前からです。私、息子の新一を守るためには、彼の言いなりになるしかなかったのです。新一をかたわにすると脅かされています。彼は本当に新一をかたわにするでしょう。彼は、狂気を秘めた青年ですわ。ですから、彼の言いなりになるしかないんです。わたしは今では、剛太さんの奴隷です……」
そう一気に言うと佳美は息を深く吐いた。胸の高い隆起が魅力的にうごめいた。
「あいつならやりかねねえな。それであなたは後ろもやつに献げているってわけかい？」
佳美はスカートから露出させた生足を組んで、
「ええ、お尻もなにもかも彼のおもちゃです……恥ずかしい質問ですわね」
と沈んだ声で言った。
「これを後ろに使うんだな」
手にした鶏卵を掌で転がした。
「おぞましい行為です。排泄器官への残酷な埋没作業を彼は好みます。私が苦しめば苦しむほど、彼は喜ぶのです。私にとってはおぞましいサディスチックな行為ばかりです。」
「やつはサドだからな。これまでの女もすべて後ろを嬲られて泣いていたぜ。レイプしてとことん犯して身体をしゃぶりつくすのさ。とことんやればサツにたれこまれることもないって言っていたな」

「後ろまで嬲られたら、女性は警察に助けを求めることは恥ずかしくてできませんわ。お尻を犯され、嬲られ、浣腸責めまで……写真を撮られています。恥ずかしい写真です。きっと他の女性も写真を撮られ、脅迫され、泣き寝入りなのでしょう。」
「剛太からその手の写真を見せられたことがあるぜ」
「やつはひどい男さ。あいつにつけいれられたらとことんしゃぶりつくされる。」
「新一は、無理矢理に空手部に入部させられたのです。大学の入学式のときから、新一と一緒にキャンパスを歩いていた私は目をつけられていたのだと彼に教えられました。それで新一を稽古という名の暴行にかけて、私が身体を提供するように仕向けたのです。新一を守るために私は、お尻も彼に弄ばれています。しかたがないんです…空手部の人達にも奉仕させられているのです…惨めです。こんな母親を笑ってください。」
佳美の瞳に涙がにじんでいた。それをハンカチでそっと拭き取ると、すくっと立ってキッチンに立った。
　健司はキッチンに立っている佳美の臀部をスカート越しに眺めた。ぷりぷりと動く形のいい尻だ。